

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.108

2011年7月13日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 パクティアの祈り (画・甲斐大策)

人間と自然との関係が大きく浮き彫りにされた一年間～2010年度現地事業報告

中村 哲

2010年度会計報告

ペシャワール会事務局

コレラ発生の際には全職員一丸となって

ドクター・ハフィズラー

マドラサ寮 (寄宿舎) 完工で孤児らに恩恵

ペシャワール会事務局

全国の皆様にお礼申し上げます。

伊藤和也家族一同

全国33ヶ所、9000人の方々にご来場頂きました

松永貴明

物価は昨年の二割高

村井光義

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

人間と自然との関係が 大きく浮き彫りにされた一年間

2010年度現地事業報告

吾々の良心的協力が、立場を超え、国境を超えて躍動しているのは、自然の理に適っているからだ。己が何のために生きているかと問うことは徒勞である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。そこに生じる喜怒哀楽に翻弄されながらも、結局はそれ以上でもそれ以下でもない。だが自然の理に根差しているなら、人は空理を離れ、無限の豊かな世界を見出すことができる。そこで裏切られることはない。

PMS 総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

11010年度を振り返り

二〇一一年を以て、現地活動は二九年目、ペシャワール会は三〇年目を迎える。この間、様々なできごとがあったが、ここまで来るとは想像できなかった。

十年前に早魃^{かんばつ}と飢餓に遭遇して以来の劇的な展開が、現在の局面に私たちを導いてきた。そして奇しくも、現地は大洪水、日本は大震災に見舞われ、人間と自然との関係が大きく浮き彫りにされた一年間であった。

ペシャワール会の支持者の多くが大震災被災地へ救援に駆けつけ、労苦を共にしようとしたのは、決して偶然ではない。目を凝らせば、日本でも現地でも、等質の問題が横たわっているからだ。人為が自然を制することはできない。人は自然の懐の中で身を寄せ合って生きている。人間もまた自然の一部なのだ。言葉で自然は欺かれない。自然の前で政治的な茶番は見苦しい。利を得るために手段を選ばず、暴力と巧言でなりふり構わず貪る時代は先が見えた。

ここ現地でも、米軍撤退が取りざたされる。だがもう興味がなくなった。暴力は暴力で倒され、茶番で始まったものは茶番で終わる。そして世の関心が去るとき、結局は自分たちで後始末をせざるを得ないのは、これまでと同じことだ。



今年は灌漑地で麦などが大豊作となった

吾々^{われわれ}は何を後世に残そうとするのか。どんな生物でも、子孫の生存に力を尽くして死ぬ。自らの安逸のためだけに、それも架空の富や権勢や名利のために、人が欺き合い、殺戮し合うのは、もう沢山だ。わずかな安楽のおこぼれに浴するため、時世におもねることはない。それが虚無感と自傷他害に至る自滅の元である。

吾々の良心的協力が、立場を超え、国境を超えて躍動しているのは、自然の理に適っているからだ。己が何のために生きているかと問うことは徒勞である。人は人のために働い

て支え合い、人のために死ぬ。そこに生じる喜怒哀楽に翻弄されながらも、結局はそれ以上でもそれ以下でもない。だが自然の理に根差しているなら、人は空理を離れ、無限の豊かな世界を見出すことができる。そこで裏切られることはない。

現地事業は見世物ではない。人間の事態に迫る生きるための努力である。報告を借りて、温かい関心をいただいた人々に心からの謝意を表し、この事業に携わる現地の人々の汗と労苦に思いを致していただければ幸いである。二〇一一年度も変わらずに力を尽くしてきた。

二〇一〇年度の概況

過去最悪の治安

二〇〇九年に行われた欧米軍増派は、いつもの治安悪化をもたらした。二〇一〇年は外国兵への襲撃だけでなく、ほとんど無意味とも言える軍事作戦が多く、市民を殺傷した。外国兵・一般市民の死亡は過去最悪の記録を更新した。

一般住民とタリバン兵を区別するのは不可能である。殺戮されたのは殆どが普通の農民・市民であったと噂されている。外国軍は十二万人に膨れ上がり、初期の十倍以上となったが、混乱も比例して増えた。軍事介入は、おびただしい犠牲者と取り返しつかぬ混乱

をもたらしたと言えよう。

無秩序が農村部まで拡大し、多くの地域で住民同士の紛争が頻発した。この紛争の背景には、「米軍撤退」をめぐる、外国勢力や犯罪グループの暗躍があるとも、軍閥内部の抗争だとも伝えられている。

憶測の真偽は、地域により事例によって異なる。だが確実なのは外国軍と中央政府が騒乱を収拾する力を失ったことである。無人機による爆撃の多発も最近の顕著な傾向で、主としてパキスタン国境沿いの村落で、日々多くの人々が命を奪われ続けている。

農村部の混乱

PMSの作業地・北部ナンガラハル州は比較的安定しているが、クナール州境付近でISAF（国際治安維持軍）に対する襲撃が活発となり、マルワリード用水路も取水口から五キロメートル地点まで、職員さえ立ち入りにくい状態に陥った。ダラエヌール渓谷では、勢力を張る軍閥が分裂抗争、村々と対立している。

民心もこれに伴って動揺、PMS診療所の土地を提供していた人の親族が暗殺され、地域間の抗争と共に、外国軍に対する敵意が一層深まり、爆発寸前となった。二〇一一年四月、ダラエヌールの村落同士の対立でANSO（アフガンNGO安全事務所）から撤退の打診があった。

同様な敵対関係が東部アフガン一帯で広く起り始め、農村を律してきた不文律が内部から大きく崩れようとしている。これを加速したのが「復興支援」の名で与えられた有力者への買収工作で、貧困層の間では公然の秘密となっている。地域長老会の権威が消滅すれば、収拾のつかぬ事態になるおそれがある。

パキスタン北西部の混乱

二〇一一年五月一日、米軍の単独行動でオサマ・ビンラディン氏が殺害されると、パキスタン側で「主権侵害」の声が上がリ、大規模な抗議運動が展開された。アフガン側では大勢に影響なかったものの、外国軍への軽蔑と敵意がいつそう深まった。パキスタン国境沿いでは最大の勢力を誇る武装勢力が出没し、同時に米軍側の無人機攻撃による犠牲者を連日出し続けている。ペシャワールの治安は再び著しく悪化した。情勢はいよいよ複雑怪奇かつ大規模な動きである。

カルザイ政権は「タリバン勢力との和解」を掲げ、米軍の撤退期限に合わせるように二〇一四年に退陣することを表明、もはや終局にさしかかったことを印象づけた。しかし、撤退後に生じる事態は誰も予測できず、人々の間で不安が蔓延している。

一方、パキスタンIIアフガニスタン両国の歩み寄りには経済関係で見られ始め、アフガン側の農産物、希少金属、手工芸品らの輸出に

便宜を図る協定が二〇一一年五月、再発効した。また、東部で圧倒的に強いパキスタン・ルビーの流通は止めることができず、両国を切り離すのは不可能である。長い外国軍の駐留は、基地経済、援助経済とも言える依存体質を作っており、今後も進行し続けると思われる早魃^ニ農業生産低下と相俟って、貧困層の間に行き詰まり感が拡大、先行きを更に不透明にしている。

大洪水の影響

二〇一〇年八月に発生した空前の大洪水は、パキスタンほど甚大な被害を与えなかったが、東部アフガンのクナル河沿いで猛威を振るった。約一〇〇名が死亡と伝えられ、吾々の灌漑事業にも大きな影響を及ぼした。洪水が取水堰などを破壊し、異例の集中豪雨と鉄砲水が連日山麓で発生、用水路の至る所で改修工事を余儀なくされた(後述)。

PMS事業の概況

ダラエヌール診療所は変わらずに続けられたが、同溪谷にある村落同士の対立で、活動を拡大できずにいる。唯一残ったPMSのダラエヌール診療所は、間もなく二〇周年を迎えるが、既述の治安悪化を受けてANSO(アフガンNGO安全事務所)から、活動引き上げの打診があった。だが、医療職員は動揺せず、診療を継続している。

大洪水のおおりの受け、二〇一〇年度で最大の仕事となったのが水利事業、特にクナル河流域の河川工事である。これは建設されたマルワリード用水路の改修、既設取水施設の大規模改修、護岸工事、懸案のカマ取水設備(堰^{せき}および取水門、主幹水路)が含まれ、PMSとしては過去最大の物量投入を余儀なくされた。

ここに至り、JICA(独立行政法人国際協力機構)共同事業としてカマ第二取水口・主幹水路の再建設、対岸ベスード郡の護岸工事が実施され、PMSが財政的な窮地をしのげたのは天祐であった。この結果、予定された工事は遅滞なく行われ、ジャララバード北部一万四千ヘクタール、六十万農民の生活を保障する見通しが確実になった。

特にカマ取水口・堰建設の成功は大きな希望とインパクトを地域に与えた。

東日本大震災の影響でPMSの財政枯渇が予測されると、直ちに緊縮態勢が実施された。ペシャワール会からの補給が極端に減少すると、これまでのような自在な動きが封ぜられる。今後もJICAなどとの良心的協力は継続されるが、文字通り「共同事業」であった、立案から設計・施工まで一貫して動けるPMSの独立性と自由さが前提である。多少規模を縮小しても、PMS独自の判断で計画実施できるものでなければならぬ。一方、

現在が最も吾々の支援を必要としている時期

である——およそこのような中で、の苦しい判断であった。

二〇一〇年度の現地活動の概要

1. 医療事業

二〇一一年四月、ダラエヌール診療所付近に混乱が及び始めると、ANSO(アフガンNGO安全事務所)から、「撤退打診」があった。私の一存で決めるわけにもいかない、勤務する医療職員に図ると、「今患者を助けねば、いつ助けられるのか。数あった医療機関は活動を事実上引き上げ、誰が患者を診るのか」と、一致した意見が強く述べられた。

職員たちしてみれば、現在以上の混乱期に診療活動を開始し、誰からも撤退を強いられることがなかった。それに、彼ら自身が故郷に愛着を持つ地元民である。二〇年の間には、何度も危機的事態に遭遇し、診療活動だけで二名の殉職者さえ出したが、話題にならなかった。勧告を謝絶したのは、当然の心情であつたらう。

ダラエヌール診療所はアフガン内で最初に設立された基地であり、間もなく二〇周年を迎える。他の診療所が戦乱で次々と閉鎖される中、最終拠点として活動が継続された。二〇一〇年度の診療内容は別表の通り(5頁表参照)。

2. 水源事業／JICAと共同事業

既述のように、大洪水によって多くの場所で改修が必要となり、中でも河川工事が大きな比重を占めた。

二〇一〇年九月に立てた計画は以下の通り。これを二年がかりで実施しようとするものであった。

- ① マルワリード取水堰・水門の全面改修
- ② カマ第一取水門補修・堰の全面改修
- ③ カマ第二取水口の建設



カマ第2取水口。2列の堰板から階段状に水が落ちる。右下の写真がレバノン杉を用いた堰板。厚さ5センチに鉄板を貼付けて浮力を殺す。

各診療所の診療数と検査件数

| 国名 | アフガニスタン |
|-----------|-----------|
| 地域名 | ナンガラハル州 |
| 施設名 | ダラエヌール診療所 |
| 外来患者総数 | 44,575 |
| 【内訳】 一般 | 38,749 |
| ハンセン病 | 0 |
| てんかん | 427 |
| 結核 | 370 |
| マラリア | 2,302 |
| 外傷治療総数 | 2,727 |
| 入院患者総数 | — |
| 検査総数 | 7,939 |
| 【内訳】血液一般 | 588 |
| 尿 | 1,498 |
| 便 | 2,005 |
| ハンセン病塗沫検査 | 0 |
| 抗酸性桿菌 | 308 |
| マラリア | 3,095 |
| リーシュマニア | 366 |
| その他 | 79 |
| 心電図 | — |
| 超音波検査 | — |

④ カマ第二用水路・主幹1km建設
 ⑤ カマ用水路対岸の護岸工事
 ⑥ ベスード取水堰（カプール河）建設
 ⑦ シエイワ取水堰の河道回復工事
 ⑧ ダラエヌール土石流路の護岸工事
 ⑨ ガンベリ沙漠開拓地の給排水路建設

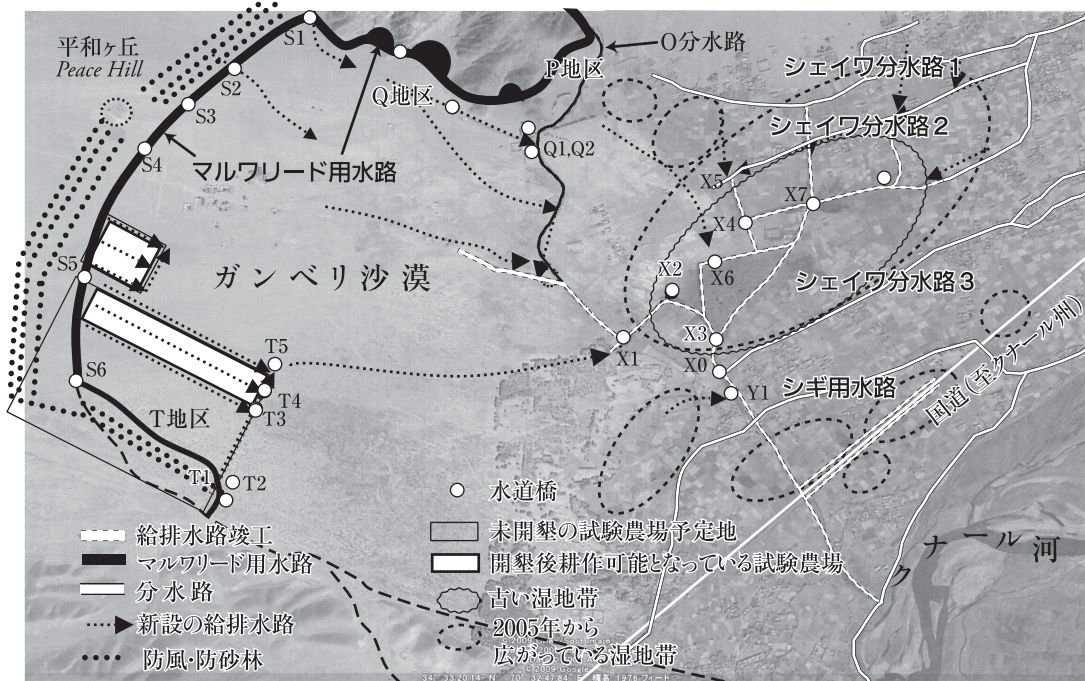
このうち、③、④、⑤、⑥を「JICA共同事業」とし、急を要するカマ用水路に集中、ベスード第一取水口は二〇一一年度実施とした。共同事業は、「JICAが現地PMSに委託」という形をとったが、PMSにとって初めての例だった。二〇一〇年十月に契約が成り、十一月から動き始めた。

しかし、河川工事は夏の準備期間で成否が決まる。実際には、交通路敷設、石材らの輸送、再調査に基づく最終設計らは八月に始まっており、十月には基礎工事に取り掛かっていた。一般に河川工事は、最も理解されにくい仕事のひとつで、不確定要素が余りに多い。しかも、川の水位が下がる十一月から翌二月までの短期に一気に済ませなくてはならぬ時間的制約がある。財政的裏付けを得て夏の準備工事に着手できたのが成功につながった。

カマ用水路・取水口・取水堰

カマ用水路はPMSが二〇〇八年に仮工事として堰の工事を毎年くりかえして来たから、立案・設計は容易であった。だが、実際の施工となると別で、巨大河川を相手に周到な準備が必要であった。昨夏の大洪水は一〇〇年に一度の規模とされ、この想定に基づいて計画が立てられていた。では、二〇〇年、三〇〇年に一度の場合も、どうなのか。「想定外はいつでも起きる」と想定するのが、

ガンベリ沙漠・シギ村周辺排水路要図 橋と水門位置 (2011年6月現在)



自然に対する人間の節度である。近年自然災害を確率の問題にすり替えて安心する傾向があるが、それは大切な目安ではあり得ても、煎じ詰めればまじないか賭博の世界と大差ない。

だがこれが護岸工事と共に、堰を作る際、最も苦慮される点である。洪水にも耐え、渇水期でも取水できるものとは、人間側の虫のよい考えであり、まさに人為と自然の危うい接点なのだ。堰に限って言えば、まさかの時、人里が崩れるよりは、堰が崩れる方がよい。また、人里と河とは思いつて離し、遊水地らの遊びを作ることである。

ここでも、筑後川の斜め堰の方法が採用されたが、成功したと見られたマルワリード取水堰も洪水で破壊され、新たな工夫を加えねばならなかった。

また、カマ取水口は過去半世紀、「誰も成功しない」とされ、肥沃な穀倉地帯・カマ郡七千ヘクタールは、年々荒

蕪地が増えていた。人口三〇万のカマは、土地の荒廃で半分が難民化していたといわれる。この主因は年々進行するクナール河の水位変動にあった。近年の気候変化に伴い、ヒンズークッシュ山脈の雪解けが初夏に急激に起き、冬季には逆に渇水に陥る。洪水と水欠乏が同居する、夏冬の極端な水位差である。

この状態で堰き上げの高さが非常に重要になる。冬の作付けを守ろうと高くすれば、夏の洪水の危険を増す。夏の洪水を避けようと低くすれば、冬の取水ができない。

この問題については、急流河川の多い日本では、近世に完成した技術があった。それが斜め堰である。基本は越流水深を必要最低限に抑え、そのために越流幅をできるだけ広くとることである。だが、マルワリード堰が壊されると、さらに入念に検討された。カマ取水堰の場合、夏の越流幅を五〇〇メートル以上とした。このため、中洲全体を堰の連続とし、中洲の洗掘防止策を徹底した。

また、クナール河の夏の水はおびただしい土砂を含み、取水口をしぼしば埋めてしまう。このために設けられるのが「砂吐き」、「余水吐き」である。これでも土砂堆積は防ぎ得ないので、下流側で「沈砂池」に導き、スライド式水門で底水を排出し、堰板水門で上水を水路に送る。

また、取水堰と同様、取水門の幅を思い切つて浅く広くすることも大切である。このた



Q 3池。全長 25.5 キロのうちこのような貯水池・遊水池が 12ヶ所造成された。池の向こうはガンペリ沙漠。

め、カマ第二取水口は異例の幅となり、大きな水門となったが、後の改修の間を考えると最も安全かつ効率的だ。これに流水圧を減らす二重の堰板列とした(10頁表参照)。

カマ取水口完成の意義と農村復興

かくて気候変動に應じる取水技術は、カマ第二取水口を以てほぼ完成した形になったと思える。この意味は少なくともことを強調したい。「農業復興」と言っても、水あつての話である。灌漑なくして農業なく、用水路な

くして灌漑なく、取水堰なくして用水路はない。現地の旧来の方法が近年の気候変動に処できず、結果、農業生産のジリ貧の低下を招いてきた。カネはいつか無くなるが、水に潤される土地は、営々と生産を続けることができる。

カマ取水口完成はナンガラハル州の長い悲願であった。PMSとしては、おそらく多くの人が見学に来るカマの堰にモデル的なものを作ってあげば、取水技術は自ずと広がり、農業生産増加につながっていくと期待したのである。

二〇一一年四月十五日、正式に行政当局に通知され、シェルザイ州知事自ら開通のテープを切った。夏の一日送水量は約一〇五万トン、冬は約四〇万トン、十二分な水量である。この陰には、窮した農民たちの結束があり、カマ長老会の「ひと冬分の小麦をつぶしても完成」という決定が、大きな支えとなったことは述べておかねばならない。

取水口対岸・ベスード護岸

このカマ堰の対岸は、大洪水で数百ヘクタールが冠水した所である。堰の建設で洪水時の水位も当然高くなるので、同時に施工した。初め、カマ第一・第二主幹水路沿い対岸、約二キロを予定していたが、十一月の低水位期になって、驚くべき事態が判明した。ベスード郡全体が、下流に向かって低い盆地で、

クナール河はその高い位置をかすめるように流れる天井川のようになっている。工事予定区間の一七〇〇メートル地点で、湾曲して同盆地へ進入する大きな分流が主流と化し、低地に向かって滔々と流れていた。洪水でなくとも夏季に大被害を及ぼすのは明らかであった。

そこで急ぎよ予定工事区間を延長、全体を三五〇〇メートルとし、進入路の閉塞、河道中心線の掘削を図った。ベスード側分流と主流との間にかすみ堤(不連続堤防)を設けて



ベスード側の護岸工事。巨石による 1700 メートルの捨石工。昨夏の大洪水余裕高を洪水レベルより 1.5 メートル以上とる。

分流へ注ぐ水量を減らし、ベスード側では防御線を思い切つて河から遠ざけて堤防を置き、低位置に石出し水制七基を設置した。

こうして取りあえず危機を脱し、河道中心へ流れを集め、低い分流に注ぐ水量は調整された。増水後、大きな被害はなく、堤防上部の天端工事はなお続けられている。連続堤防の一八〇〇メートル地点までは専ら巨礫による捨石工を採用し、堤防高約六〜八メートルを築き、川底を深くすると共に、川幅を約五〇メートル拡大した。

増水期の六月二〇日現在、水面から天端までの高さは四〜五メートル以上、冬の低水位との差は約一メートル以下、昨年程度の洪水なら大過は想定しにくい。万一冠水しても、広い畑が遊水地と化し、悲劇的な事態は避け得る。現在、川沿いに植樹を進めている（10表参照）。

マルワリード用水路の復旧作業

大洪水は用水路沿いにも集中豪雨を伴い、同用水路全線、十数カ所で土砂流入、決壊が起きた。中でも取水口近傍のジャリババ溪谷からすさまじい量の土砂が流入し、沈砂池を埋めつづした。

最大の被害は取水堰の被害である。堰そのものは破壊されなかったが、堰を渡した大きな中洲が流失した。これによって水位が下がり、洪水流入は起きなかったものの、十一月

には用水路流域に深刻な渇水状態をもたらし、ガンベリ沙漠開拓も中断した。

二〇一〇年十二月から復旧工事を始め、二〇一一年一月までに必要水位を回復した。河道を分割して礫石で中洲を復元、蛇籠を埋設して急流に耐えるようにした。対岸カスコート村の指導者が作業を妨害したため、中断しているが、今秋まで待つ以外に方法はない。妨害とは重機の拿捕で、自分の村の護岸工事を要求したものだだったが、PMSはゆとりがなく拒否、重機を奪還して中洲から引き上げた。

浚渫工事は最低必要限だけを行い、これも二〇一一年度に持ちこされた。

その他の河川工事

シェイワ取水口では洪水流入は水門から五センチを超えるだけで、大きな被害はなかった。しかし、河道が砂利で埋まり、十月になって水が途切れた。幅二〇メートル、長さ約八〇〇メートルを掘削して河道回復を図り、急場をしのいだ。が、本工事は次年度に持ちこされた。

ダラエヌール溪谷下流、用水路サイフォンが埋設される土石流路は、激しい流れで水があふれる寸前となった。川幅を広くすると共に、中心部を掘削して深くし、両岸堤防を約六〇〇メートルにわたって高くした。

3. 農業関係

二〇一〇年度、約四五ヘクタールが開墾され、初の水稻栽培が三ヘクタールで行われた。小麦栽培が約三五ヘクタールで収穫を得た。しかし、この間、ガンベリ沙漠でも集中豪雨による鉄砲水が襲い、洪水排水路の建設が改めて痛感された。

一方、クナール河ーシギ村から掘り進んできた排水路網は、ガンベリ下流のクナデイ、カラテク村の湿害を一掃し、中小のものを入れると、計三五〜四〇キロメートルに及んだ。

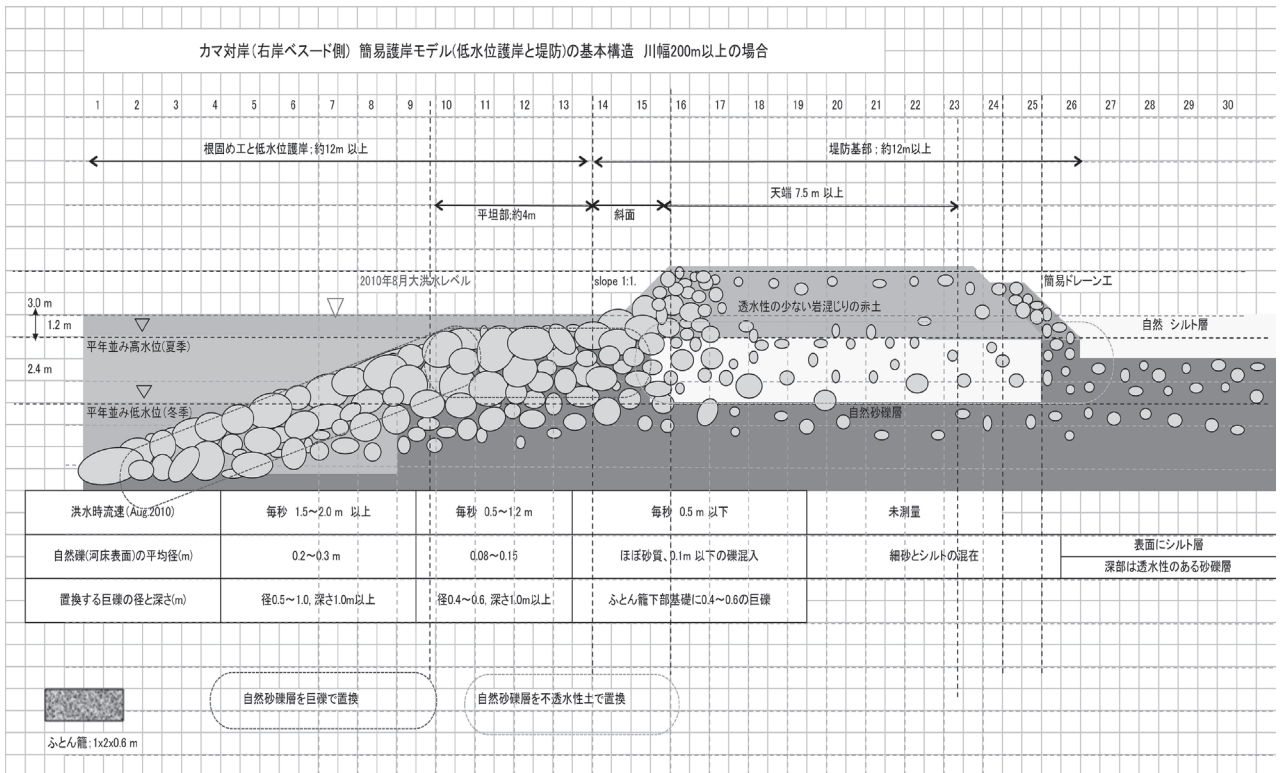
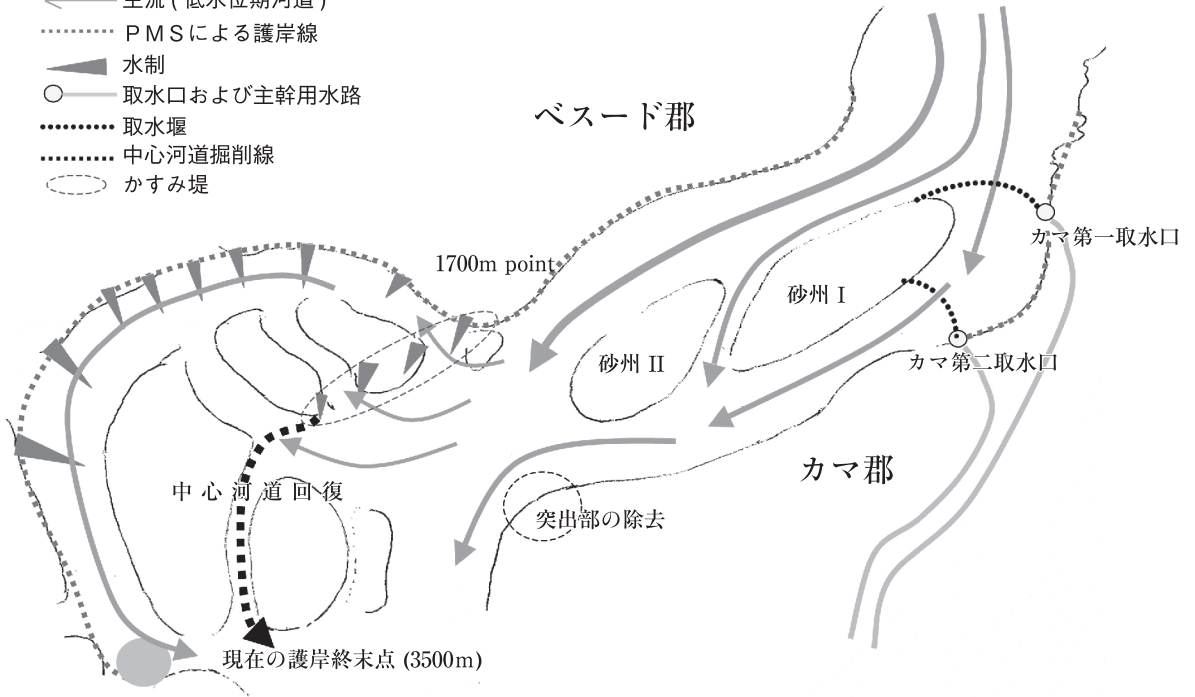
湿地処理は一応全ての耕作地を回復しているが、排水路主幹が狭く、将来的にガンベリの全ての水が通過することを考えると、十分な排水能力があるとは言えない。とくに急激な鉄砲水は、湿害を増す恐れがある。ガンベリ沙漠は、表面は砂であるが、一〜三メートル地下に厚い粘土質の地層がある。思ったより保水性がよいのはこのため、灌漑が進むと一部は湿地化する。

洪水対策だけでなく、灌漑用水路敷設に伴う浸透水貯留を防ぐため、主要排水路の建設、計約一二キロメートルを進めた。二〇一一年度中に完成予定。

二回の夏を越した新開地は、熱風と砂塵にさらされ、収穫に影響が出ることが分かってきた。ことに二〇一一年五月初旬から六月中旬まで五週間、猛烈な砂嵐が連日襲い、約二

PMSによる護岸工事の概要 (2010.11 ~ 2011.10)

- ← 主流 (低水位期河道)
- ⋯ PMSによる護岸線
- ▲ 水制
- 取水口および主幹用水路
- ⋯ 取水堰
- ⋯ 中心河道掘削線
- かすみ堤



カマ取水堰と主幹用水路の概要

| 水路の名称 | カマ第一用水路 | カマ第二用水路 |
|----------------|---|---|
| 主幹水路全長 | 1350 m (うち PMS 改修 370m) | 1020 m (全長新設) |
| 場所 | アフガニスタン国ナンガラハル州カマ郡 | |
| 平均傾斜 | 0.001 | 0.0015 |
| 標高差 (落差) | 1.2 m | 1.6 m |
| 取水量 | 2.5 ~ 4.0 m ³ /秒 | 5.0 ~ 10.0 m ³ /秒 |
| 送水量 | 3.0 ~ 4.0 m ³ /sec. (一日 25 ~ 40 万トン) | 4.5 ~ 8.5 m ³ /秒 (一日 45 ~ 100 万トン) |
| 推定損失水量 | 約 25% 以下 | 25 ~ 35% (浸透損失 15% 以下、無効水 10 ~ 15%) |
| 推定灌漑可能面積 (水稲)* | 1500 ~ 2000 ヘクタール | 4500 ~ 6000 ヘクタール |
| 水路沿い植樹総数 | 約 2000 本 (柳枝工) | 約 12000 本 (柳枝工) |
| 設計・施工者 | PMS (Peace(Japan) Medical Services) | |
| 工期 | 2008 年 12 月 20 日 ~ 2011 年 3 月 31 日 | 2010 年 10 月 1 日 ~ 2011 年 4 月 20 日 |
| 取水堰越流幅 | 350 (冬季) ~ 550 (夏季) m | 80 (冬季) ~ 110 (夏季) m |
| 取水堰越流長 | 基部約 15 ~ 20m (主に捨石工) | 基部約 15 ~ 20m (主に捨石工) |
| 主幹水路工種 | 素掘り、両岸捨石工と柳枝工 | ソイルセメント・ライニング、両岸蛇籠工・柳枝工 |
| 主要付帯設備 | 水門番小屋 1、取水門 | 取水門、調節池、調節門、排水門、橋、水門番小屋 2 |
| 備考 | PMS (Peace(Japan) Medical Services) | PMS と JICA の協力事業 |

* 既に灌漑している耕地と給水量から算出。土壌の保水性、作付けの相違で、日本の基準とは必ずしも一致しない。

各区別概要 (流量・工種など)

水門の概要

| | 場所 | 目的 | 方式 | サイズ (水門幅・個数) | 通常通過流量 (m ³ /秒) | 備考 |
|---|-------|-------|---------|-----------------|----------------------------|--------|
| 1 | 第一取水口 | 取水量調整 | 手動・堰板式 | 幅 1600mmx3 (二列) | 4.5 ~ 5.5 | 取水 |
| 2 | 第二取水口 | 取水量調整 | 手動・堰板式 | 幅 1500mmx4 (二列) | 5.0 ~ 12.0 | 取水 |
| 3 | 第二調節池 | 送水量調整 | 手動・堰板式 | 幅 1600mmx3 (一列) | 4.5 ~ 10.0 | 灌漑路へ送水 |
| 4 | 第二調節池 | 排水量調整 | 手動スライド式 | 幅 1500mmx1 | 0.5 ~ 10.0 以上 | 浚渫と排水 |

護岸工事など

| 場所 | 構造物 | 長さ | 幅 | 工種の概要 |
|---------|-----|------|------------|----------------------|
| 第一取水口上流 | 護岸 | 160m | 1.5 ~ 2.0m | 巨礫による川岸掩蔽 |
| 第一取水口下流 | 護岸 | 350m | 4.5 ~ 8.0m | 高さ 6.0 ~ 8.0m、二段の捨石工 |

植樹数 (2011 年 4 月 30 日現在)

| 第一期工事 | | | |
|-------|-----------|-----------------|----------|
| 樹木 | 場所 | 目的 | 本数 |
| ヤナギ | 開水路内壁 | ①用水路護岸の強化、②法止め工 | 13,500 |
| ユーカリ | 第一用水路外壁斜面 | 法止め工 | 200 |
| 計 | | | 13,700 本 |

カマ取水堰対岸 (ベスード) 護岸 2011 年 6 月 20 日現在

| 区域 | 距離 | 水面からの高さ | | 堤防種 | 基部幅 | 天端幅 | 工種 | その他 |
|---------------|-------|------------|-------------|------------------|-----------|---------|--------|---------------|
| | | 低水位期 | 高水位期 | | | | | |
| 工事始点 ~ 1700 m | 1700m | 6.0 ~ 7.0m | 4.5 ~ 5.5 m | 連続堤防 | 25 ~ 40 m | 8 ~ 12m | 捨石工根固め | |
| 1700m ~ 3500m | 1800m | 4.0 ~ 5.0m | 3.5 ~ 4.0m | 非越流水制 護岸 | | 7m 前後 | 石出し水制 | 洪水進入路 の締切り |
| 主流一支流分岐部 | 500m | 0 ~ 1.0m | | かすみ堤 (不 連続堤防) | | | | 河道中心線掘削して主流回復 |

| | |
|---------|-------------------------------------|
| 護岸の名称 | クナール河ベスード護岸 |
| 全長 | 3500m |
| 場所 | アフガニスタン国ナンガラハル州ベスード郡 |
| 設計・施工者 | PMS (Peace(Japan) Medical Services) |
| 工期 | 2010 年 11 月 ~ 2011 年 |
| 工種 | 上表参照 |
| 植樹数 (柳) | 1 7 7, 7 5 0 本 |
| 主要付帯設備 | 小取水門 (予定) |
| 備考 | JICA 共同事業 |



生長したガンベリ沙漠の防砂林

○ヘクターを除いてことごとく砂に埋めつぶされた。一部には砂丘が出現し、改めてその猛威を知った。概ね防風林の成長していない場所で被害が多く、砂嵐の季節が去るのを待って、植樹に全力を上げる。なお、これによって、二〇一一年度の水稻植付は中止、小麦まきの季節までアルファルファ・落花生・大豆らの豆類やトウモロコシを主に植えて緑肥とする予定。

二〇一一年度は、植林・給排水路の整備が中心で、本格的な農業生産活動は行えないのが実情である。なお、用水路開削以来、総植

樹数は八十万本、年内に百万本に達する。

4. ワーカー派遣

二〇一〇年度は、以下のワーカーが事業に参加した。余りに多い作業地を抱え、一人では不可能と考え、駆けつけてくれた数名を呼び寄せたが、治安悪化とケアのゆとりのなさを考慮し、現場は慣れた鈴木学一名にしぼった。事務・会計関係では、杉山・村井が定期的にジャララバード市内に滞在した。二〇一一年度は、現場Ⅱ中村、会計Ⅱ村井の二名とし、リスクを減らす。

2010年度現地派遣ワーカー

| | | | |
|---|-------|------------|----------------|
| 1 | 杉山大二郎 | 農業事務・現地連絡員 | '05年2月～'11年3月 |
| 2 | 村井光義 | 会計事務・現地連絡員 | '05年3月～ |
| 3 | 石橋忠明 | 用水路 | '10年9月～11月 |
| 4 | 手島利治 | 用水路 | '10年9月～10月 |
| 5 | 鈴木学 | 用水路 | '10年10月～'11年2月 |

なお、日本国内から通信だけで進め得る仕事は少なからずあるが、事業の性質上、現場での監督・指導なしに河川工事も医療活動も進まないことは理解いただきたい。また、会計も同様である。

日本側ではペシヤワール会がボランティアの良さを生かして募金・報告活動を行い、現地

側ではPMSが実事業を進めるのが本来の姿かと思われる。どちらが先という問題ではない。どちらが倒れても事業は分解する。実戦部隊と後方支援との違いで、PMSはボランティア団体ではない。職員百数十名、作業員四〇〇名の生活・生命、そして何よりも現地数十万農民に責任を負う事業体である。事業の挫折は、彼らが路頭に迷うことを意味する。両者が協力せねば成り立たないの言うまでもない。だが、目の前の仕事に忙殺されて流転する現地事情に理解が及ばぬことがある。今後、日本の協力者の厚意に報いるためにも、事業展開を正確に伝える工夫が欠かせない。

5. マドラサ寮建設

二〇〇七年十二月鍬入れ式の後に整地作業を始め、建設工事が二〇〇八年三月から行われた。二〇一〇年二月七日、モスク（七〇〇名収容）、マドラサ（モスク付属学校、生徒数六〇〇名）を完成していたが、遠方から来る子弟、孤児や貧困家庭の子供にも教育機会を与える。

そのためにマドラサ寮（寄宿舎 一八〇名）の建設が痛感されていた。寮建設は二〇一〇年三月に始められ、翌二〇一一年四月三〇日に竣工、五月一日に譲渡式を行った。これは旧ワーカー・故伊藤和也くんのご両親（伊藤和也アフガン菜の花基金）によって建

設資金が寄贈された。大洪水によって工期が延びたが、何とか譲渡までこぎつけた。マドラサは行政上、宗教省から教育省に管理が移され、登録で多少の混乱があったが、ジア医師が奔走して合法手続きを完了、これを機に正式登録にこぎつけた。教師の人数を安定して確保できるように、マドラサ側も懸案を解決できた。

設計と施工はPMSが全て行った。今後同モスクとマドラサが要となって地域安定に寄与することは計り知れず、物心両面で支えて下さった方々に、現地農民に代わり、心から



完成したマドラサ寮（寄宿舎）の譲渡式

謝意を表する。

6. 自立定着村の建設

現在の政情と社会不安の中で、入居は当分、進めない。情勢が落ち着くまで数年間、開拓作業を続けながら、自然に住民たちとのよい関係が熟するのを待つべきだとの判断である。

だが村共同体は建物ではなく、共に生きてゆくための、人間同士のきずなである。現在職員たちがガンベリ沙漠で共に汗を流すことが、地域への愛着を共有する不可欠の要素だとご理解いただきたい。焦ることはないとの判断である。

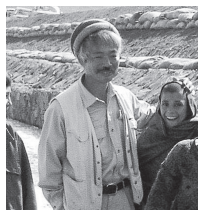
二〇一一年度の計画

年度報告に述べた通り。農地開拓、用水路保全、排水路整備、植樹（とくに防風防砂林）等、基本的にこれまでの継続である。農業計画はまだ準備段階だと言えよう。

医療面ではハンセン病診療場の確保が遅れているが、政情の変化を考慮し、急がない。ダラエヌール診療所は、二〇〇年を経て建物が老朽化しており、諸般の事情で建て替えが必要になってきている。二〇一一年度に時期を決め、二〇一一年度末から二〇一二年度初めに改築を予定している。

JICA（独立行政法人国際協力機構）共同事業については、ベスード郡のカブール河取

水口建設が最大の仕事となる。ベスード郡については、過去数年間、主要取水口を全て手がけてきたが、何れも仮工事で終わってきた。ベスード灌漑がPMSの手で成れば、北部ジャララバード全域をカバーするのが確実に、良い「地域安定復興モデル」が完成すると期待される。



中村 哲（九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境

州の州都ペシャワールに赴任。以来二八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大規模対策のための水源確保（井戸掘り・カレースの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二・五キロが開通した。年間診療数約四万五千人（一〇年度）。

2010年度の主な収支

ご寄付を頂きました団体名につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。
 期間 2010年4月～2011年3月

一般会計(単位:円)

[収入の部]

| | |
|----------|---------------|
| 1 会費・寄付 | 373,200,942 ① |
| 2 補助金等 | 0 |
| 4 利息雑収入 | 202,056 |
| 5 収益事業収入 | 1,771,826 |
| 6 基金繰入 | 0 |
| 年度収入計 | 375,174,824 |
| 前年度繰越 | 30,113,601 |
| 収入計 | 405,288,425 |

[支出の部]

| | |
|----------|---------------|
| 1 現地協力費 | 308,761,318 |
| うちPMS運営費 | 2,562,600 ② |
| 灌漑用水路 | 295,605,386 ③ |
| ワーカー費 | 1,808,303 ④ |
| 渡航費 | 6,540,870 |
| 国内活動費 | 2,244,159 |
| 2 広報費 | 12,479,767 |
| 3 事務局費 | 21,845,019 |
| 年度支出計 | 343,086,104 |

- ① 個人会費寄付(個人21,238件/団体956件)
- ② バキスタン診療所
- ③ 農業用灌漑用水路建設
- ④ 現地支援ワーカー等
- ⑤ カレンダ1、DVD印刷、農業記録販売収入
- ⑥ 事業所税等

10年度会計報告

収益事業会計

[収入の部]

| | |
|-------|-----------|
| 書籍売上 | 3,508,719 |
| DVD売上 | 2,649,350 |
| 雑収入 | 404,278 ⑤ |
| 売上収入計 | 6,562,347 |

[経費の部]

| | |
|--------------|-----------|
| 書籍等原価 | 3,966,718 |
| 販売費 | 224,178 |
| 雑損失 | 6,825 |
| 租税公課 | 592,800 ⑥ |
| 経費合計 | 4,790,521 |
| 当期収益(一般会計繰入) | 1,771,826 |

「いのちの基金」残高

| | |
|------------|------------|
| 期首残高 | 50,000,000 |
| 一般会計から繰り戻し | |
| 期末残高 | 50,000,000 |

| | |
|-------|-------------|
| 次年度繰越 | 62,202,321 |
| 支出計 | 405,288,425 |

●「伊藤和也アフガン菜の花基金」からの学校宿舍建設寄付

| |
|------------|
| 20,000,000 |
|------------|

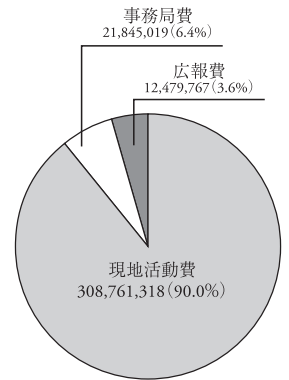
*頂いた寄付でマドラサ宿舍建設及び農業用資材を購入しました。

未使用切手、書き損じ葉書の寄付

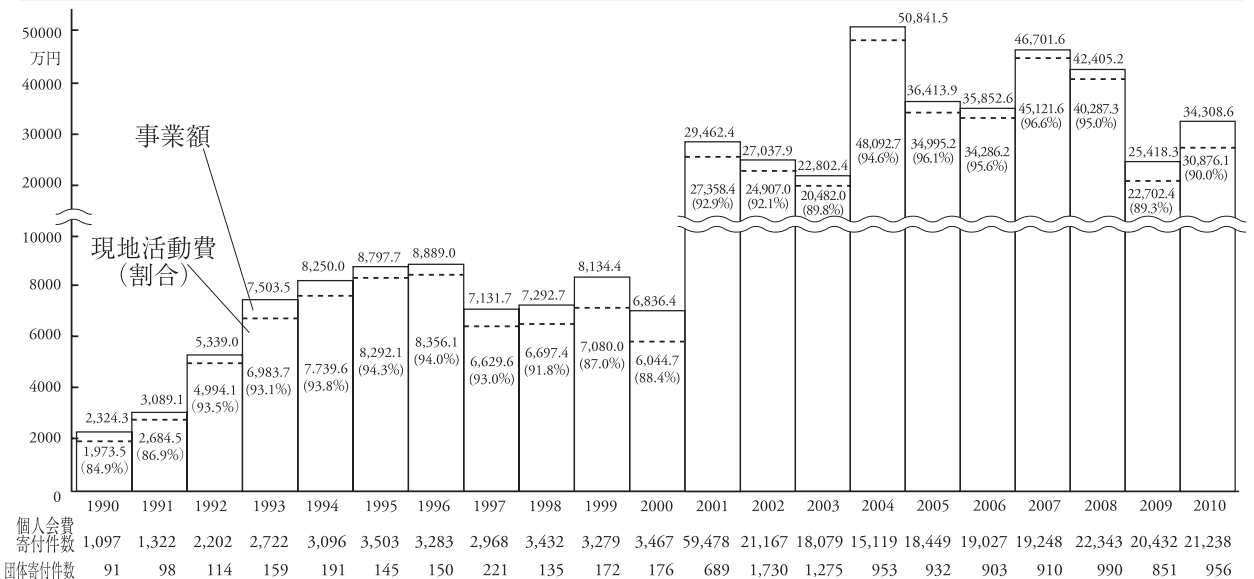
| | |
|------------|--------------|
| 寄付いたたいいた件数 | 1,142件 |
| 未使用切手枚数 | 28,836枚 |
| 同 金額 | 4,258,603円相当 |
| 書き損じ葉書枚数 | 43,455枚 |
| 同 金額 | 2,092,951円相当 |
| 合計金額 | 6,351,554円相当 |

*会報発送費用の節約になっています。

●2010年度事業額(支出ベース) 343,086,104円



事業規模(寄付件数・事業額)の推移 1990~2010(年度)



コレラ発生の際には全職員一丸となって ——他州からも患者来院

ダラエヌール診療所医師 ハフイズツラー

「PMSジャパン」は一九九一年よりナンガラハル州ダラエヌール郡カライシャヒ村で診療所を運営している。医療機関の種別としてはBHC (Basic Health Center)：基本的診療所)にあたり、管轄地区はアムラ村とカライ・シャヒ村で人口はおよそ一万八五〇〇人。

診療所の職員数は十四名で、内訳は医師二名、看護師二名、ワクチン担当職員二名、検査技師二名、事務職員一名、調理担当一名、公衆衛生管理担当一名、門衛三名。

活動内容は以下の通り。

① 毎朝七時に職員全員集合し、出欠を取ると同時に前夜に治療を受けた救急患者の申し送りをする。

② 朝礼後、男女それぞれ別の待合室で診療を待っている患者達に職員が衛生教育を行う。

③ その後、外来患者に診察カードを渡し、外来診療を開始する。時間は基本的に午前七

時から午後十二時三〇分か一時までで、一日平均一八〇人を診療している。患者には前述のように男性も女性もいるが、児童が大半を占める。疾病は季節によって多岐にわたり、例えば夏季にはマラリアや下痢症が増加し、冬季には肺炎の症例が増える。

外来患者数が多い理由として我々の管轄外地域、例えばバルコート (Barkoot)、ブディアライ (Budyalai)、ウィーガル (Wigal)、シエメール (Shemal)、スータン (Sutan) などの遠隔地や、更にはクナルルやラグマンといった他州からも患者が来院していることを特筆しておく必要がある。それは当診療所が標準医療を備えており、二四時間診療を行っていることが大きい。外来診療終了後、我々職員はお祈りをして昼食をとり、その日の診療報告を作成する。月末にはこの日次診療報告書を元に政府に提出するM.I.A.R (月間総診療報告)を作成している。救急患

者については当所で治療できる症例は治療するが、そうでない場合はジャララバードの公的病院に送っている。外来診療以外にもワクチン投与や、結核プログラム、てんかん症治療なども行っている。検査室も備えており、二名の検査技師が勤務している。当所が行っているワクチンプログラムは以下の通り。

ワクチン投与担当職員二名が週のうち四日間は診療所勤務、二日間はアウトリーチ活動で地域社会に出かけている。それ以外にも全国予防接種日キャンペーンが(年に)十回から十二回実施されるが、一回につき三日間ほどをかけて各家庭を巡回し、五歳以下の児童に経口ポリオワクチンを投与している。

結核プログラムは二〇〇八年十二月二日から実施している。

結核患者数は左の通り。

| | |
|-------|-----|
| 二〇〇八年 | 二名 |
| 二〇〇九年 | 五〇名 |
| 二〇一〇年 | 五八名 |
| 二〇一一年 | 一八名 |

現在、当診療所では結核患者二〇名が治療中で、他は治癒している。二〇一〇年以降、死亡例はゼロである。

昨年八月末のコレラ発生の際には、医師から門衛まで全職員一丸となって全力を尽くし、



ダラエヌール診療所で診察中のハフィズツラー医師（左端）

その結果、この致命的疾患から三九七名の患者を救うことが出来たが、残念なことに一名の患者が亡くなった。

公衆衛生病院からは感謝状が贈られ、地域住民も我々の医療サービースに大変満足している。そのため、何かある毎に地域住民が協力を申し出てくれていて、保健委員会という名の長老会も設置され、そのお陰で我々の活動はより効率よく実施出来るようになって来ている。

治安は何よりも重要な問題であるが、一般的にアフガニスタン全土にわたって治安情勢

はあまりよくない。しかし、ナンガラハル州は他所に比べて治安はよく、ことにダラエヌール地区は州内で一番安全であるように思われる。

*

最後に、私自身について語らせて頂きたいと思えます。私の名はドクター・ハフィズツラーといい、二〇〇五年九月十六日からPMS ジャパンで勤務しています。「なぜお前はPMS ジャパンを選んだのか」という疑問が湧いてくるかと思えますので説明いたしますと、PMS ジャパンは極めて優れた医療サービースを住民に提供しており、この医療施設の発展のために私でお役に立つことはなんでも貢献したいと申し出たところ、受け入れて頂きました。私はダラエヌール診療所に勤務できると大変嬉しく思っておりますし、これからはずっとPMS に協力していきたいと思っています。

▼寄付をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

国籍

甲斐大策

サファル・バハール！（良い旅を）

8

羽虫が地表近くに群れている。

トガン家の前に広がるマイmana平原は、時季を早めた雛罌粟が一面に狂い咲いたように、日没間近の陽光で真紅に染まっていた。

北部一帯の治安要員養成訓練から長男アウルが戻り、もどかし気に革靴の紐を解く。制服を普段着に換えコラアをかぶる。

「ドイツ兵の教官が、ウズベキを喋る男で、顔つきもトルキで、……」

話しかけられた妹はただ微笑している。

「ドイツ人になって何代目かのトルキイ・ムハジール（移民）だ。この国のウズベクより多いくらいだ。」奥から現れた祖父が真顔で説明する。

「パパ、カリン（絨緞）買いに来たフランス人、色は黒いし、パンジャビカドバイあたりのアラビイか、と思っただけです……」

「ああ、あの男はカーブルの北にいるフランス軍についてきた商人さ。国籍はフランスだ。国籍で人は判断できんよ。人は人……」

表に車が降り、集荷してきたカリンを降ろすの手を伝え、とアウルを呼ぶ父の声が響く。

十枚程のカリンを土間へ運び終えた頃、妹がバケツの水を前庭に運ぶ。祖父、父、アウルの順に、ウドウー（祈りの前の浄め）をすませる。代々トガン家の祈りに供してきたカリンをアウルが地面に投げ、三人は両手を耳元に太陽のやや左を向いて立ち、祖父に従う。

アッラーフ・アクバルに始まる祈りはこの日も、トガン一族にとって最も安らかな静かなひとときだった。昨冬野火が焼きつくしたあたりには数頭の駱駝がシルエットになっていた。太陽が沈む。

家の裏手でけたたましく驢馬が声を上げる。「トルクメン、キルギス、タジク……」

「河向う、母さんの里の一族は違う国籍だ。だからといって……」

父と息子の会話は、夕闇に囲まれていきながらそれぞれ、独り言めいていた。

マドラサ寮（寄宿舎）完工で孤児らに恩恵 「伊藤和也アフガン菜の花基金」で建設

ペシャワール会事務局

モスク・マドラサ（神学校）の付属寮（寄宿舎）は「伊藤和也アフガン菜の花基金」の援助により、建設が可能となり二〇一〇年三月に着工し、本年（二〇一一年）四月三〇日に完工いたしました。「菜の花基金」の理事会の皆様はじめ基金への寄付を頂きました皆様方に対し、心よりの感謝を込めてご報告いたします。

念願だったモスク・マドラサの建設は、二〇〇八年三月着工以来、モスク・校舎に次いで一八〇名の付属寮の建設で完成し、地元権威筋（アフガン政府教育省及び地域教育関係者）に五月一日、正式に譲渡されました。これによって教育の機会が得られ難かった貧しい家庭の子供、孤児らに大きな恩恵が及ぶことかと思えます。故伊藤和也君も、子どもたちの将来を憂慮するとともに生前、旧試験農場（ダラエヌール渓谷）近くの村のモスク建設に寄付したこともありまして、今回の建設を喜んでくれると思います。

このモスク・マドラサは、ナンガラハル州北部のクズ・クナル地方全体をまとめる要ともなり、地域の平和に寄与する意義は計り

知れません。なお、頂きました寄付の一部は農業関係の耕耘機等の購入にも使わせて頂きました。
以上感謝とお礼を込めて、謹んでご報告いたします。

全国の皆様に
お礼申し上げます。

伊藤和也家族一同

庭には和也が母の日にプレゼントしてくれた紫陽花の花が、雨にうたれながらも色鮮やかに咲いております。

*

和也が願ったアフガニスタンの子供たちの平和な将来のためになにか出来る事は無いかと考え、私たち家族は二〇〇八年十一月に「伊藤和也アフガン菜の花基金」を設立致しました。基金には全国の皆様から二〇一一年五月三十一日現在 二八、七六三、六四一円のお



完成したマドラサの寄宿舎

ご寄付をいただきました。

そしてこの度、ペシャワール会の協力を頂きアフガニスタンにマドラサ寮を建設することが出来ました。五月一日に地元権威筋に譲渡され、九月から子供たちが入寮する予定だそうです。ここで教育を受けた子供たちが、これからの平和なアフガニスタンを造って行ってくれることを願っております。マドラサの建設資金と共に、農業支援として脱穀機とトラクターの購入資金を会に託しました。

これも全国の皆様から頂きましたご寄付のおかげと感謝申し上げます。

日本経済厳しい折、本当に有難うございました。

私共いつまで続けられるかわかりませんが、もう少し続けて行くことが出来たらと思っております。

*

なお、伊藤家の墓地に和也の慰霊碑を設立いたしました。

私たち家族は今なお悲しみが癒える事はありません、何か形としてそれぞれの想いを残しておきたいと考え、和也が眠る墓の横に建てました。和也直筆の「和」の字を刻み、ペシャワール会への志望動機を記しました。

私たちが和也の遺志を忘れないためにも、和也の願いを忘れることなく伝えて行くためにも、そして世界が平和であるようにとの願いも込め設立致しました。

皆様方にも、お近くにお出での際にはお立ち寄りくださいませ。

*

またあの日と同じ季節が廻ってきます。同じ花がさいてまいります。

自然の力、怖さを感じる今日この頃。アフガニスタンの治安も依然不安なままです。

平穏な日々を願う毎日です。

今後も皆様方にはお世話になります、よろしくお願ひ申し上げます。

時節柄ご自愛くださいませ。

二〇一一年六月

昨年の六月から全国巡回が始まったペシ

ヤワール会現地報告写真展『人・水・命』は、二〇一一年六月二一日現在、全国二二都道府県三三か所において開催されました。

来場者数は延べ九千

人。本当に多くの方々
に足を運んでいただき、
ありがとうございました。

ただ、東京都での開催は三月十一日が初日

で、開始四時間ほどで

地震のためやむなく中止

。しかし、その後も

交通状況がままならな

いなか閉鎖された会場

へ来られた方が多くあ

ったと聞き、写真展へ

の関心の高さを実感し

ました。現在、東京都

での写真展再開は検討

中で、詳細が決定次第

追ってお知らせいたします。

また、もともと中村医師から支援者の

方々へ写真を使つての報告という主旨で企

画した写真展でしたが、東日本の震災後に

は別の見方をする方も散見するようになり

現地報告写真展のお礼とご報告

全国 33 カ所、9000 人の方々に ご来場頂きました

ペシャワール会事務局・現地連絡員

松永貴明

ました。

展示写真のなかに草木のほとんど生えない荒地の写真とその数年後に用水路が通り緑豊かな田畑へと変貌した同じ場所の写真があります。アフガニ

スタンの農村の復興が
わかりやすく見て取れ
るその二枚の写真に東
北の復興を重ねてご覧
になりました。さらには、こ
ういった写真展を東北
で開催したら励みにな
るのではないかと来場
者からの提案も頂きま
した。

写真展の企画者とし
て元気になって頂ける
写真があると確信して
いますので、機会があ
ればどこへでも出向き
たいと考えております。

これからも写真展は継続してまいりますので、共催して下さる方がいらっしやいますら、お問い合わせてください。

現地の写真に興味を持って頂くだけでも嬉しく思います。

ワーカー通信

物価は昨年の二割高

タンパク源は主に豆類

ペシャワール会事務局・現地連絡員

村井光義

肉は年に2回だけ

今回は食材とその価格を紹介します。

八百屋や果物屋では、ハウス栽培をしないので季節のものが並びます。日本では一〇〇グラム単位ですが、こちらは大家族（一大家族は一〇―二〇名）のせい、少ないものでも一キロ単位で売っています。「一マン」＝七キロ、「一チャールラック」＝二キロなどの独自の単位もあります。日本のように同じ場所を店を構えている人もいれば、単品（今季節はキュウリやトマト）を手押し車で売っている人もいます。昨年ガンベリ沙漠でとれた両手に余るほどの大きなスイカ（約一五キロ）は、町では二〇〇円くらいします。

牛肉屋は一頭丸ごと捌き、量り売りします。

肉は他の食材と比べて値が張り、以前職員から聞いた話では、彼の家では年に二回（イードの時…日本での正月やお盆でしょうか）

だけ肉を食べると言っていました。牛肉料理ではジャガイモや水を加えて嵩を増やし、鶏肉料理は鶏肉のみで調理します。肉の値段は羊肉が一番高くて、牛肉と鶏肉は同じくらいですが、経済的には牛肉の方が良いようです。羊をよく食べていると日本でイメージされますが、羊は牛の倍以上の値段なので、めつたに食べることはありません。タンパク源として豆類（ひよこ豆、赤豆）をよく食べます。

一般的なメニューは主食のナンに、おかずは油でトマトとタマネギを炒めたあと水を加え、豆や野菜を煮込む料理です。具材が変わっても味はあまり変わりません。タマネギと季節の野菜（大根・カブ・ニラ・コリヤンダーなど）のサラダも好まれます。ヨーグルトもあり、暑い季節はヨーグルトに水を加え、塩で味を調え、ジュースにして飲むこともあります。みんなこれを飲むと良く眠れると言います。来客時や祝

いの時には、家で放し飼いでいる鶏や上質な米を振る舞います。自宅での食事は床にマットや布を敷いて料理を置き、家

族一同車座になって食べますが、自宅以外では男女は同席することができず、別々です。十時と三時のチャイ（お茶）の時間も大切で、社交の場となっています。

ナン屋は食事どきに合せて営業します。食事の時間は、日の出頃、正午、日暮頃など一日に三度窯に火を入れます。お天道様とともに生活しているので、季節によって食事の時間が違います。例えば朝食の時間は、夏は朝早く、冬は少しゆっくりです。ナンの形は円や楕円で、ナン表面の模様はさまざまです。ジャララバードの市場価格（二〇一一年四月）は添付の表のとおりです。パキスタン国

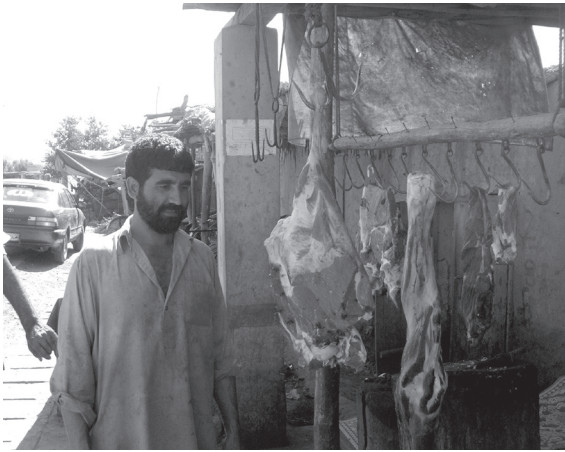
| 品目 | 単位 | 現地通貨 | 日本円換算 |
|----------|-------|----------|-------|
| 小麦粉 | 1kg | Rs.40 | 40円 |
| ナン | 300g | Af.9 | 16円 |
| トマト | 1kg | Rs.31.42 | 31円 |
| タマネギ | 1kg | Rs.14.28 | 14円 |
| ジャガイモ | 1kg | Rs.28.57 | 29円 |
| 米(上質) | 1kg | Rs.85 | 85円 |
| 米(並) | 1kg | Rs.50 | 50円 |
| 赤豆(インゲン) | 1kg | Rs.84 | 84円 |
| ひよこ豆 | 1kg | Rs.69 | 69円 |
| 牛肉 | 1kg | Rs.350 | 350円 |
| 料理油 | 1ℓ | Rs.137 | 137円 |
| 砂糖 | 1kg | Rs.78 | 78円 |
| 牛乳(パック) | 200ml | Rs.20 | 20円 |
| 茶葉(紅茶) | 1kg | Rs.360 | 360円 |
| 茶葉(緑茶) | 1kg | Rs.260 | 260円 |
| 軽油 | 1ℓ | Af.59.5 | 107円 |
| ガソリン | 1ℓ | Af.59.5 | 107円 |

*ジャララバード使用通貨

パキスタンルピー (Rs) Rs.1 = 1円 / アフガニー (Af) Af.1 = 1.8円

*灌漑事業 現場作業員 日当

Af.200 / 日 = 360円



肉屋



ナン屋（奥のタンドールで焼く）



現場職員達の昼食



八百屋

境に近いジャララバードではルピーとアフガニの二つの通貨が使われています。トマト、タマネギ、ジャガイモが半端な値段なのは「一マン」単位で購入したからです。肉の値段が際立っていると思いませんか。

一般家庭は電気の無い所が殆どで冷蔵庫はありません。その日に食べるものを必要なだけ買っています。

昨年と価格を比べると、二割程度物価が上昇しているように思われます。今後も物価の上昇が止まる気配はありませんが、安定して水を田畑に取り入れることの出来る用水路を掘り所に、安心して家族一緒に暮らして欲しいと願っています。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円以上要しております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*一部地域の方々の会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

●事務局便り

*PMSの存亡を懸けて取り組まれたカマの第二取水口が完工し、ベストドの護岸工事も増水期に間に合った。マルワリード水路の取水口付近の改修工事も完了した。試験農場では、昨秋の稲作だけでなく春には小麦の収穫も得た。またマドラサの寄宿舎も完成した。一カ所だけでも大変なプロジェクトだが、時間と過酷な自然との闘いの中で、それぞれを完遂した中村医師をはじめとする現地スタッフに感謝したい。

*昨年夏起きた大洪水の復旧工事が一段落するかと思われた三月、東日本大震災に見舞われた。今回の大災害は、天災の問題だけでなく、原子力発電事故が加わることによって、これまで当たり前と考えてきた「人間優位の自然観」と「経済的に豊かで効率的な暮らし」を無反省に目指してきた私たちの「生活観」そのものを問われている。事務局では被災地にお住まいの会員の方々にお見舞いの手紙を出させて頂いた。それに対してたくさんの方々からご返事を頂いた。それぞれに苦境と闘いながら精一杯生き抜いていらっしゃる様子に、改めて励まされた。また、アフガニスタンの人々の苦境にも思いを寄せて頂いた。お心に深く感謝すると共に、皆様方が心穏やかな日々を取り戻されることを、お祈りいたします。

*ペシャワール会の企画したDVD「アフガンに生命

の水を」(日本電波ニュース社制作 菅原文太氏ナレーション)が、土木学会映画コンクールで最優秀賞を受賞した。受賞理由は以下の通りである(抜粋)。「現地の石組みなどの在来技術を極力活かし、持続的なメンテナンスを地域の人々がまかなえるように配慮/命を守り生活を支える土木技術者の魂を伝えるものであり、大地の医師と呼ぶにふさわしい内容といえよう」

◎村から

退職後に縛られた生活から解放され時間に余裕が出来、さてボケないようにするには?と考えていた矢先、ある雑誌に挟み込まれて「ペシャワール会を支援する」という票が目にとまりました。活動の事は新聞で読んだ覚えがありました。行動に移す手立てがわからなかったのですが、すぐにでも出来るのではと思い、連絡し、翌日から手伝い始めました。水路計画の説明を受けたのはそれから少し経ってからだと覚えております。福岡という地の利を以って、中村先生、ワーカーさん達のなまの報告を受けたり、現地の様子は動画や音声で知ることが出来、喜んだり、残念がったりと共有させて頂いております。今しばらく「自分で出来る事だけを」との気持ちでパソコンに向かっています。後は、映像ではなく実際にこの目で緑豊かになったアフガニスタンの空気にふれたいと願いながら事務局を後にしている私です。(M)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【3刷】1890円

辺境で診る 辺境から見る 【3刷】1890円

医者 井戸を掘る 【10刷】1890円

医は国境を越えて 【6刷】2100円

ダラエヌールへの道 【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて 【8刷】1890円

アフガン 高橋修・編著
農業支援奮闘記

農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者 甲斐大策の物語 1890円



石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 電話092(714)4838

人は愛するに足り、
真心は信ずるに足る

アフガンとの約束
中村哲/澤地久枝(聞き手) 1995円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 電話03(5210)4000

価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAHOUSE(〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル六〇三号)〇九二―七三二―一三三七二)内におく。